

サムエル記下 3 章 2～39 節

2025 年 7 月 2 日(水)

はじめに

本日はサムエル記下 3 章 2～39 節を学びます。ここには、新共同訳の小見出しに従うと「ヘブロンで生まれたダビデの息子」、「アブネル、ダビデの側につく」、「アブネル、暗殺される」と三つの記事があります。これらの記事をとおして、3 章では、最早、サウル家のイスラエルとダビデ家のユダは争うのではなく、サウル家がダビデに従い、ダビデの王国成立に向かっていく様子が語られています。

I サムエル記下 3 章 2～39 節の話の流れ。

早速、本日のサムエル記下 3 章 2～39 節を見てみましょう。まず 3 章 2～5 節は「ヘブロンで生まれたダビデの息子」という記事です。これは 3 章 1 節に記された「**ダビデはますます勢力を増し**」ということを具体的に語っています。これまでの逃亡中のダビデには、息子が与えられた記事はありませんでした。しかしユダの王となりヘブロンに居を構えてから、ダビデには息子が 6 名与えられ、ダビデの力を示しています。

さて 6～21 節は「アブネル、ダビデの側につく」という記事です。アブネルは、サウル王の遺児イシュ・ボシェトをイスラエルの王に擁立した実力者です。38 節でダビデは彼を「**イスラエルの偉大な将軍**」と呼んでいます。ただ戦上手というだけではなく、見識のある政治家でもあるということです。

アブネルは、あることがきっかけとなって、サウル王家のイスラエルをダビデに従うように導くことにします。そのため第一にダビデに使者を送りいわば事前協議を行います。第二に、その事前協議にしたがい、ダビデは、サウル王家のイシュ・ボシェトに、サウルの娘ミカルを連れて来るように求め、イシュ・ボシェトはそれを実行します。

第三に、やはり事前協議に従い、アブネルは、イスラエルの長老たちとベニヤミン族に対してダビデを王として迎えるようにと勧めます。

その上で第四に、アブネルは 20 人の部下と共にダビデと会談し、イスラエルとユダの統一王国を創ることで合意しています。

ところが 21 節後半～39 節にあるように、ダビデ家の将軍ヨアブはアブネルを暗殺してしまうのです。ヨアブは、ダビデがアブネルと会談した後、平和のうちに送り出したことを知って、ダビデに抗議します。会談の内容を聞くこともなく、アブネルをスパイであるかのように思ったのです。そして帰途についていたアブネルをヘブロンへ呼び戻すと、城門の中に誘い込んでアブネルを暗殺してしまうのです。アブネルは先のギブオンの戦いにおいてヨアブの弟アサエルを殺害しました。そのため、ヨアブとその弟アビシャイは復讐したわけです。

こうしてイスラエルとユダの統一王国という構想は、崩壊の危機に瀕します。しかしダビデは、まっさきにアブネルの死に対して潔白を表明し、彼を悼むのです。しかも全軍を上げてアブネルの死を悼み、悲しみの歌さえ詠んでいます。こうしたダビデの姿勢は兵たちにも全イスラエルにも感銘を与え、アブネル暗殺はダビデの意図ではなかったことが明確となりました。こうしてアブネルとダビデの「統一王国」成立に向かって動いていきます。なお、ダビデは自分の姉であるツェルヤの息子であるヨアブとアビシャイについては、手を焼いていると言い、そこで主御自身が、悪をなす者に報いてくださるようというのです。

以上のことを箇条書きにすると、次のようになります。

1. 3 章 2～5 節 **ダビデ、6 名の子供を得る。**
2. 3 章 6～21 節前半、アブネル、ダビデと契約を結び、ダビデにイスラエルを委ねる。
 - (1) 21 節後半～11 節 アブネル、サウル王の遺児イシュ・ボシェトに対し、全イスラエルをダビデに委ねるという話をする。
 - (2) 12～13 節 アブネル、ダビデに使者を送る。
 - (3) 14～16 節 イシュ・ボシェト、ミルカをダビデの下に連れて行く
 - (4) 17～19 節 アブネル、全イスラエルとベニヤミンに対して、ダビデが王となることを認める

ようにと勧める。

(5) 20～21 節 アブネルとダビデの会談

3. 3 章 21 節後半～39 節

(1) 21 節後半～27 節 ヨアブ、アブネルを暗殺。

(2) 28～39 節 ダビデ、アブネルの死を悼む。

Ⅱ. サムエル記下 3 章 2～39 節の解説

【2～5 節】

ここには、ダビデがヘブロンでユダの王となった 7 年間に六人の息子が与えられたことが語られています。それは以下のような者たちです。

- | | |
|-----------|------------------|
| ①長男アムノン | 母イズレエル人アヒノアム |
| ②次男キルアブ | 母カルメル人ナバルの妻アビガイル |
| ③三男アブサロム | 母ゲシュルの王タルマイの娘マアカ |
| ④四男アドニア | 母ハギト |
| ⑤五男シェファトヤ | 母アブタル |
| ⑥六男イトレアム | 母エグラ |

以上の 6 名です。これによって、サウル王家が衰退していくのに対し、ダビデ王家が「ますます勢力を増した」ことを具体的に示しています。

①と②は、ダビデがサウル王の追撃を受けている時代からの妻たちです。③～⑥は、ダビデがヘブロンに定着してから得た妻たちとの息子たちです。③はいわゆる政略結婚でしょう。④と⑤は、⑥が「ダビデの妻エグラ」と明記していることと比べると、正妻ではなかった者たちである、と思われま

【6～11 節】

さて話は一転し、サウル王家の内情になります。まずここでは、はっきりと「サウル王家とダビデ王家の戦いが続くうちに、サウル王家ではアブネルが実権を握るようになっていた」といわれています。サウルの遺児イシュ・ボシェトは王としての影が薄くなっていったのです。これは、おそらくダビデ王家との戦いにおいて彼がリーダーシップを発揮できなかったということではないでしょうか。それに対してアブネルは、ダビデが 38 節で「イスラエルの偉大な將軍」と評しているように、優れた実力者であったようです。したがってここに、王であるイシュ・ボシェトと將軍アブネルの間で確執が生じていても不思議ではありません。

しかもそのタイミングで、アブネルは実権を握っていたところから、先王サウルの側女であったリツパと通じました。そのためイシュ・ボシェトは、アブネルに「なぜ父の側女と通じたのか」といって非難しています。これは、道徳的に不正であるという意味ではなく、王権を侵害しているという意味なのです。側女たちのいる後宮は、王のものだからです。逆に言えば、イシュ・ボシェトには、それ以外にアブネルを批判することが出来なかった、ということです。

それに対して、アブネルは、いわばイシュ・ボシェトに対して、あからさまに本音を語ります。第一に、アブネルは、イシュ・ボシェトの非難は、自分を、王権を狙うユダの者たちと同列に扱うことであって、非常な無礼であるといっています。というのは、アブネルこそは、サウル王家に対して忠実に仕えてきた者だからです。そのため彼は、イシュ・ボシェトに面と向かって、チャンスがあったが、「あなたをダビデの手に渡すこともしなかった」というのです。

第二に、その上で、アブネルは決定なことをいうのです。「主がダビデに誓われたことを、わたしがダビデのために行わないなら、神がこのアブネルを幾重にも罰してくださるように。わたしは王権をサウルの家から移し、ダビデの王座をダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に打ち立てる」そのように語りました。これは、サウル王家に対する反逆ともとれる言葉です。しかしアブネルは、主なる神の御心に従って、しかもサウル王家が滅びないかたちで、王権をダビデ家に、平和的に移譲することを考えているのです。イシュ・ボシェトが自分の王権に執着する姿

勢と比べると、実に、深い展望をもった構想です。

こうして 12～13 節まで、アブネルはダビデといわば事前協議をするため、使者をダビデの下に派遣しました。「わたしと契約を結べば、あなたの味方となって全イスラエルがあなたにつくように計らいましょう」といっています。それに対してダビデは、「よろしい。契約を結ぼう」と即答しています。つまりダビデの考えと一致していた、ということです。ただし、ダビデは、その際、サウルの王の娘ミカルを必ず連れてくるようにといっています。これは、ダビデがサウル王家の継承者であることを示すためですが、もともと先王サウルがダビデに次女ミカルを妻として与えていたわけですから。それを後になって、サウルは、例の心変わりのために、彼女をダビデから取り上げ、パルティエルという者に与えてしまったのです。ですからダビデとしては、自分の正妻はミカルであって、不正を正し彼女を戻す、ということです。

このような事前協議に従って、まずダビデはサウル家の王であるイシュ・ボシェトに対して、使者を遣わし「ペリシテ人の陽皮百枚を納めてめとった妻ミカル」を返していただきたいと申し入れました。イシュ・ボシェトは直ちに承諾し、ミカルをその夫、ライシュのパルティエルから取り上げてダビデに返還しました。パルティエルは泣きながらミカルの後を追ってきましたが、アブネルに帰るように命じられると、おとなしく帰っていきました。パルティエルは、自分がどのような経緯でサウル王の娘ミカルを得たのかを知らなくはないからです。

次に、アブネルは、ダビデに約束したように、イスラエルの長老たちに、ダビデを王として認めるように働きかけました。「あなたがたは、これまでもダビデを王にいただきたいと願っていた。それを実現させるべき時だ。主はダビデに、『わたしの僕ダビデの手によって、私の民イスラエルをペリシテ人の手から、またすべての敵の手から救う』と仰せになったのだ。」そのようにアブネルは告げます。こうしたアブネルの言葉は、サムエル記上 24 章 21 節のサウル王の言葉、またサムエル記上 26 章 22～24 節のダビデの言葉を踏まえたものです。

かつてアブネルは、ギルボア山でのペリシテ軍との戦いでサウルが討ち死にした後、混乱を避けるために、イシュ・ボシェトをイスラエルの王に擁立しました。そのため彼はイスラエルの長老たちと話し合ったことがあったのでしょう。その際、彼らがダビデを王にいただきたいという本音を言っていたと思われます。しかしその当時、アブネルは、ダビデの意向がどこにあるのかを見極める必要があったため、彼らの要望にすぐに応じるわけにはいかなかったのでしょう。何しろダビデは一時的にせよ、敵であるはずのペリシテのアキシュと良好な関係にありました。また、これまでダビデを追撃してきたサウル王家を滅ぼす可能性もなくはないからなのです。だからこそアブネルは、まずイシュ・ボシェトを王に擁立したわけです。

またアブネルはベニヤミン族に対しては直接、話し合い、イスラエルとユダの統一王国構想について賛成を得たようです。このように民意を統一した後、アブネルは、「イスラエルとベニヤミンの家全体との目に良いと映ったことについて直接ダビデに話そうと、ヘブロンでダビデのもとに行った」のです。

こうしてアブネルとダビデは、直接会談をします。ダビデは「酒宴を催し」歓迎の意を示しています。そこでアブネルは「わたしは立って行き、全イスラエルを主君である王のもとに集めましょう」といいました。後は、「彼らがあなたと契約を結べば、あなたはお望みのままに治めることができる」だけとなったのです。このようにしてアブネルは、サウル王家とダビデ王家の争いに終止符を打ち、ダビデ王のもとで、全イスラエルとユダの統一王国を創出する準備を整えたのです。それがまた、サウル家を存続させる道でもあったからです。

以上のようにアブネルの「統一王国」創出の構想は、実に深い思慮にもとづくものであり、またダビデもそれに心から賛同しました。しかしそのような人間の思いに寄りかかって神の民イスラエルが王国になることはありません。主なる神が、御心のままに、王国を創出するのです。

【21～39 節】

さてアブネルは、ダビデ家のヨアブによって暗殺されてしまうのです。それは、アブネルが平和のうちに帰途に就いたのと入れ替わるように、ヨアブたちが多くの戦利品と共に略奪から戻ってきたときのことでした。

ヨアブたちは、ダビデとアブネルの会談について、その重要性について全く知りません。ただ

ヨアブは、アブネルがダビデと会談し、平和のうちに帰らせたことだけを聞きます。そのためヨアブは、ダビデに対して抗議します。ヨアブ・アビシャイ・アサエルの三兄弟は、ダビデの姉ツェルヤの子どもたちでしたから、叔父であるダビデに「物申す」ことがしやすかったのかもしれませんが。ヨアブは、アブネルを信用していません。「王を欺くためか、王のなさることを調べに来た」と一方的に告げています。しかしダビデはそれに反論したり、説得したりしていません。ここに親族における上下関係を見て取ることができるでしょう。

その上でヨアブは、帰途に就いたアブネルを呼び戻しました。アブネルが戻ってくると、ヨアブはアブネルを城門の中に誘い込み、刺殺してしまったのです。それは、かつてギブオンにおける戦のときに、アブネルが、ヨアブの弟アサエルを槍で殺したため、その復讐を果たしたのです。こうしてダビデとヨアブの統一王国構想は消滅の危機に瀕したのです。

そこでダビデは、早速、アブネル殺害は、自分の意図ではなく、ヨアブたちの独断によることであることを明確します。アブネルの死について「わたしとわたしの王国は主に対してとこしえに潔白だ」といっています。そしてヨアブの家に対して、主の裁きが降るようにといいました。具体的には、ヨアブ家からは弱い者と貧しい者しか出ないように願ったのです。

次にダビデは、アブネルをヨアブとヨアブの率いる全軍を召集して喪に服するように命じました。これはいわば国葬扱いにしたということです。そのようにしてアブネルをヘブロンに葬ったのです。その時、ダビデは「声を上げて泣き、兵士も皆泣いた」のです。そしてアブネルを悼む歌をうたいました。さらにダビデは悲しみのあまり断食もしています。これは、ダビデの政治的なパフォーマンスではありません。かつて若き日のダビデは竖琴弾きとしてサウル王の宮廷に召されて以来、ヨナタンやアブネルを知るようになりました。さらにダビデが対ペリシテ戦に従軍するようになると、アブネルの知恵と武勇を知られもしたと思われます。実際、ダビデは「お前に比べられる者は、イスラエルにいない」（Ⅰサム 26:15）というほどに、アブネルを尊敬していたのです。だからダビデにとってアブネルの死は戦友の死であり、まさに心裂けるほどの悲しみであったわけです。

こうして「すべての兵士、そして全イスラエルはこの日、ネルの子アブネルが殺されたのは王の意図によるものではなかったことを認めた」のです。したがってアブネルとダビデが構想した全イスラエルとユダの統一王国というヴィジョンは、イシュ・ボシェトにせよヨアブにせよ見識の狭い者たちによって失われようとしたましたが、辛うじて残ったのです。主なる神がそれを用いておられるからです。つまりアブネルのような思慮深い者やイシュ・ボシェトとヨアブのような見識の狭い者などが引き起こす人間の混乱を貫いて、ただ主なる神の御心が実現に向かっていくのです。

これは今日の教会においても同じです。教会は、人間の尊敬すべき知恵や残念な愚かさによって建てられるのではなく、ただひたすらに主イエス御自身が建てていくのです。ですからわたしたちに求められるのは、繰り返し主イエスの御言葉に聞き従うということなのです。

なお、ダビデは、「わたしは油を注がれた王であるとはいえ、今は無力である。あの者ども、ツェルヤの息子たちはわたしの手に余る」といっています。それゆえにこそ、「悪をなす者には主御自身がその悪に報いられるように」というのです。ここでも、ダビデは、全イスラエルとユダの統一王国は、主なる神が立ててくださることに、改めて望みを託すのです。それは、また今日のわたしたちも同じです。